

失われた1年を振り返って

土井智香子

「新型コロナウイルス」という言葉を最初に耳にしたのは2020年1月中旬だったと記憶している。未知のウイルスによる肺炎は中国の他の都市にも広がっており、日本にもいずれは流入するだろうとの見方であったが、今ひとつ危機感がなかった。人間は見えないものを恐れる。信じる。だからと言って畏怖しすぎるのもよくない。顕微鏡は見えないものを見せ、コンピューターは先のことを予測してくれるようになった。未知といっても、この新型肺炎にはすぐに対処法が見つかるだろうと思っていた。

私は同年の4月から1年間、タイ王国のバンコクに駐在する予定だった。子供の頃からずっとぼーっとしたまま社会人になったことにどこか後ろめたさを感じていた私は、人生で何かに挑戦したいという思いから、勤めている奈良先端科学技術大学院大学の研修制度を使って、独立行政法人日本学術振興会（Japan Society for the Promotion of Science; JSPS）の国際学術交流研修に参加したのだ。2019年度の東京本部での研修を終え、2年目の海外研修へと旅立つこととなっていた。ビザも航空券も準備し、日本の住居も家具家電も引き払う手筈を整えていた。渡航できないなどは露ほどにも考えていなかった。

3月、予想に反して日本では事態は長期化していた。

マスクを着けることがマナーになり、電車内で咳をしようものなら白い目で見られるようになっていた。正しい手洗いの方法が喧伝され、日本中の店からマスクや消毒用アルコールが消えた。誰もが発熱や味覚障害を恐れていた。しかし、その時点では全世界的と言えるほどの問題ではなく、欧州は楽観的な状況だった。

事態が急変したのは3月中旬である。欧州でコロナが猛烈な勢いで拡散し、外務省の海外渡航勧告レベルが一気に「3」へと引き上げられた。これ

を受け、3月下旬、研修の渡航延期が決定された。延期は3か月を目途とし、7月までに再渡航の見込みが立たなければ、2020年度の派遣は見送るというのがJSPSの結論であった。

荷物も住居も全部なくなった状態で、急遽JSPS東京本部に残留が決まった上に、東京に緊急事態宣言が発出されたため、わけのわからないまま在宅勤務が始まってしまった。急遽始まったものだから、体系的なことは何も決まっていない。根拠規程なしに物事を起こすのは公務員系の世界では御法度なのだが、JSPSとはそれがまかり通ってしまう魔境であった。この期間、勤怠管理も支持系統も杜撰であり、この機関が年間2300億円もの日本一有名な研究費を管理していることが恐ろしいと感じた。

在宅勤務とされた1か月間は緊急で借りた赤坂の民泊に閉じこもる日々だった。本来ならば海外に飛んでいたはずの自分に仕事などなく、私は1日のほとんどを、部屋の中で自分の境遇を憐れむことに費やしていた。あまりにも時間がありすぎて、許可をとり研修の一環としてオンラインで英語を勉強してみたが、海外へ行けるかもわからないのに、自分が英語を操れることが何の役に立つのかわからなかった。

なぜ自分は今ここで立ち止まっているのか。どこで何を間違えたのか。思い返せば、ずっとぼんやり生きてきて、相応の努力もなく、何となくうまくいっていたことに対して、ずっと後ろめたさはあった。いつかしっぺ返しを食らうと恐れていた。

「私は必ず、今に何かにひどい目にヤツツケられて、叩きのめされて、甘つたるいウヌボレのグウの音も出なくなるまで、そしてほんとに足すべらして真逆様まつさかさまに落されてしまふ時があると考へてみた」⁽¹⁾。

坂口安吾のこの一説をずっと自分のことだと思って生きてきたが、ふわふわと生きていたことに対してついに報いを受け、真逆さまに落ちたのだと感じていた。それでも職を失ったり感染したりすることもなく、中途

(1) 坂口安吾(2008年)『風と光と二重の私と・いずこへ』岩波文庫、369頁。

半端に落とされたものだが、ひねもすベッドに横たわり涙を流したのは一度や二度ではない。

緊急事態宣言後、赤坂の街から喧噪が消えた。昼はサラリーマンであふれ、夜はネオンの輝いているはずの街は、ゴーストタウンと化していた。民泊で自炊もできず、コンビニ飯にも飽き、他のものが食べたいと思っても、店が開いていない。しばらくして飲食店が弁当を販売するようになったので食のバラエティは増したが、それまではコンビニが自分にとっての生命線だった。経済が止まるということは、人が消え、光が消えることだと思った。

何も動いていない東京の静けさの中に、自分ひとりが立っている奇妙な感覚だった。時間を持て余して、行く当てもなく東京の街を歩いたりもした。首相官邸前も、霞が関も、日比谷も、銀座も、六本木も、歩き続けた。多くのものがありすぎてその全貌を知ることができないと思っていた東京の街は、この異常事態において、無駄なものを削ぎ落として存在していた。この時になって初めてこの大都市を理解できた気がした。江戸から続くこの都市の、徒歩で動ける範囲内で、この国の多くのことが決定されている。そこに私が介在する余地はなかった。インターネットさえあれば、どこでも誰かと繋がってられる。物が手に入る。私が東京で何もできずに立ち竦んでいた。

むなしかった。何も、自己実現のためだけに東京に来たわけではなかった。科学技術の発展に寄与することにやりがいを感じて大学職員の業に就き、国際交流の重要性を信じて奈良を飛び出したのは事実だ。自分にも何か社会的役割があり、誰かの役に立っているはずと信じていたのに、この時の私はあまりにも無力だった。生命の維持が第一とされる状況で、国際交流や学術振興など何の意味もない。自分の無力を突き付けられることほど、自己肯定感を削ぐものはない。

結局、2020年度中の海外渡航中止が決定され、私は7月から奈良に舞い戻った。東京から京都行のガラガラの新幹線に乗り、惨めさも悔しさとも言えぬ、敗北感のような気持ちで、車窓の景色を眺めていた。

今後、海外渡航の権利をずっと持ち続けることになったが、この時には

もう自分の中にモチベーションはなかった。東京五輪が1年延期されたことで現役引退を表明したアスリートがいたが、その心情に共感を覚えたほどだ。たった1年、されど1年。日本において、女性の30歳とは「いい歳」と言われる年齢である。この時間を棒に振ってまで、海外に行きたいのかと問われたところで、首肯することはできない。

それでも行かなければならないと考えたのは、この研修に理解と支援をくださった奈良先端大の厚意をふいにすることができなかったからだ。裏返せば「行かなければ、今までにかけてもらった費用、つまり税金をドブに捨てる」という強迫観念でもあり、事実、そのことについて多方面から圧をかけられてもいた。結局は他者の意向を汲んだのであり、自分の意思で決定する余地はなかった。2021年1月現在、4月の渡航に向けて準備しているが、決して気持ちは晴れてはいない。おそらく現地での生活に制限がかかるので、室内でできることを考えなければならない。果たしてそれが「海外経験」と言えるのかは不明であるが。

しかし、タイへ渡航しなければ一生後悔することが見えているのも事実だった。私はそういう諦めの悪い女だ。そのせいで失恋もしてしまったが、相手への未練よりもこの後悔が尾を引くとわかっていたから、譲れなかった。チャンスはあと1回限りと決めている。その1回に希望をつないでいるのだ。

そんな意固地な私を、家族だけはそれぞれの立場と想いで、理解し、支えてくれた。彼らには彼らなりのコロナ禍のストーリーがあったので、ここに紙幅を割きたいと思う。

母は何も言わなかった。反対したところで、娘がタイに行くことはわかっていたのだろう。手作りのガーゼマスクを送ってくれた時、添えられた手紙には、「元気で」とだけ書いてあった。それがただ一つ、母が私に願っていることだろう。昔から正しい道を歩けなくて、迷惑をかけてきて、30歳にもなって、また心配をかけていることが申し訳なかった。

父は65歳になり、2019年末をもって会社をリタイアしていた。中国語のスキルと新聞記者のキャリアを買われ、中国からの医療ツーリズムの広報担当として仕事のオファーをいただいたのだが、コロナ禍によりその話

は頓挫してしまった。40年以上ぶりに社会との繋がりを絶たれたシニアはアイデンティティ危機に陥ったが、後述の初孫誕生により「じいじ」としてのアイデンティティを開花させるに至った。私に対しては、姉のように地に根を張って生きてほしいに違いないが、あえて言葉にはしていない。

3歳上の姉は、出来の悪い妹と違い、回り道もせず生きてきた親孝行者だ。その姉の妊娠が発覚したのは2月末だった。コロナが妊娠出産にどう影響するかもわからない状況で、彼女は外出するリスクを冒すこともできず、日常生活で多くの制限を受けながら、小さな命を守っていた。小さな命は、コロナなど無関係にただ本能のまま育ち、11月21日、3932gで生まれてきた。この姪っ子を、私は可愛いと思う。無垢で、悪意などなく、ただ生きている。私もそうでありたかった。コロナ禍につき、夫の立ち合い出産も許可されず、生後2か月経ってもお宮参りには行けていない。この子が物事を理解できる頃には何も気にせずどこへでも行けるようになってほしいと願っている。

高齢者施設に入っている祖母には2020年の正月から1年間会えていない。高齢者はコロナが重症化するリスクが高く、施設では面会謝絶となっているからだ。元気になっているのか、私のことを覚えているのか、どう1日を過ごしているのか。次に会えるのはいつなのか。会えるのか。どうしても残り時間を意識してしまう。私が帰国するまで、無事を願うしかない。

コロナ禍で私は無力感を思い知ったが、同時に自分を思ってくれる家族の有り難みにも気付くことができた。離れていることで孤独を感じることはあるものの、技術で距離を埋められることを知った。

振り返ると、この1年は自分にとって失われた時間であり、結局ただ遠回りしただけだった。何の意味もない喪失を「仕方ない」の一言で片づけられず、恨み言を言いたい相手が山ほどいるが、卑屈になることに意味はない。もう世界はコロナ以前には戻れないのだから。

無力であることを受け入れる。そして、無力なりに足掻く。それが、コロナ禍における私の解である。